

雄々しくそそり立つハマドのモノが赤緒の眼前に晒される。
そのあまりの生々しさに赤緒は息を飲む。
動けず、ただその脈動を凝視する。

「これをどうするか……わかりますね？」

ハマドの不気味な囁き。彼がどうしてほしいのかは無垢な赤緒でもわかる。
何度も犯され、ハマドの冷徹さ、その恐怖を知った。
絶対に屈しないと心に決めていた赤緒も、この男には逆らえないと、どこかで感じていた。



h

ちゅ



はあ、

んあ！

んん、

ちゅ
ちゅく

まろ



んげん

んん
んん

んん

ぐぼん


ぐん

ぐぼん

ぐん

んげん

ははは



赤緒は心の中で何度も叫んだ。
嫌だ！ 気持ち悪い！ 臭い！ 苦しい！
たまらず吐き出そうとすると、ハマドがさらに強く押し込んでくる。
休むことなど許されなかった。
ハマドは赤緒がただ穢れる事だけを望んだ。
赤緒の心も身体も、全てはハマドの所有物。
この女の全てを支配する。
ハマドは赤緒の全てを穢そうと、また強く、
そして激しく腰を打ち付けた。



赤緒はハマドの言うがままにモノを
啜え続けた。
激しい恐怖と屈辱、嫌で嫌でたまら
ない。
しかしその気持ちとは裏腹に、赤緒は
何度も頭を前後に振り、口を窄め、強く
啜る。
認めたくなかった。
自分が少しづつこの男に屈し、従順に
なりはじめている事を……